

## 11 地理学専攻

松 川 孝

渡辺 操先生から私の専任講師採用が教授会で決定したことを知らされたのは、一九五四年四月二二日であった。だいぶもめたようである。そうとも知らず私は、決定前に一回講義をやってしまっただけで、操先生をあわてさせた。多田文男先生からは、「あの不精者の佐藤(弘)さんが、悪天候の中を教授会に出てこられたのだから、君はよっぽど感謝しなければいけないよ。」といわれた。

当時の文学部の教授会に私の人事のために、多田・佐藤・渡辺の三先生が出席しておられたのである。そのほか岡山俊雄先生も多分出席された。多田先生は東大教授、佐藤先生は一橋大教授であり、岡山先生は建設省地理調査所の部長であった。一九四六年九月から兼任講師となられ、一九五三年三月から農林省をやめてこられた操先生だけが、ただ一人の地理の専任教授であったと私は思っていた。ところが調べてみると操先生は、一九五九年三月までは、短大社会科に籍があった。先生はその科長として一九五六年から四年間、大学の評議員に選任されたのだと思う。

なお多田・佐藤両先生はこの当時すでに、今は廃止された「兼任教授」待遇になっておられた。岡山先生の場合は、「僕は一九三四年に明大専門部にきた時から専任だったと思う。」と御自身いわれていたが、大学の記録で一九三四年四月就任となっているのが、身分上どういう扱いだったのかよく分からず、先生の定年の時、年金受給資格などの関連で、多少私も気をもんだことがある。というのは先生が地理調査所をやめて、一九五四年秋から文字通り明大の専任になられるに際して、文学部教授会で何等かの手続きがおこなわれ、その時私は、明大では私のほうが岡山先生より先輩なのかと思った記憶がある。また、岡山先生は一九五五年二月から五八年九月まで史学地理学科長をつとめられたが、文学科の先生の中には、新任間もない人がなぜ科長にと疑問を呈された方があったと、これは岡山先生御自身からうかがった。同じ専門部でも地歴科はずっと夜間部であり、岡山先生のような形の専任教授が可能であり、必要でもあったのであろう。新制大学文学部成立以後も、少なくとも地理では一九五四年前半までは、このような事態が続いていたようである。

しかし、私が新任間もなく出席を認められた文学部教授会には、渡辺 操先生は当然のこととして出席されたが、多田・佐藤両先生は、もはや一度も出席されることがなかったように思う。一〇月からは岡山先生がフルタイムとなられ、さらに一九五五年四月には総理府資源調査会の石井(当時藤井)素介氏を専任講師として迎えた。この時期に新制地理の基礎はほぼ固まったといえよう。

一九五四年の四月二七日、私ははじめて地理の学生の集りに出席した。新入生歓迎会であった。岡山・渡辺両先生のほか、多田・佐藤両先生もやや遅れて出席された。多田先生や佐藤先生は、本務校の学生以上に明治

の学生が気に入っておられたふしがある。ところで歓迎会に出た学生は、一年から四年まで五〇人以上で、私はその数の多さにおどろいた。ところが実はそれでも、当時の地理の全学生数の三分の一にすぎなかった。この年の三月に卒業した地理の学生は、わずか三人であったが、新四年生は三〇人余り、この年の新入生は六〇余人と急増した。学生定員はこの年以後はほとんど変わっていない。その点でも、明大地理の今の形はこの時期につくられたといえる。なお、小疇 尚教授はこの年新入のやんちゃな学生の一人であった。

明大地理は、研究活動の点ではいうまでもないが、教室の民主的な気風の点で、全国大学のどの地理学教室にもひけをとらないと、私は自負している。その基礎をきずかれたのは、何といっても岡山先生であるが、渡辺 操先生や多田先生、佐藤先生の果たされた役割も大きい。

まず大御所であり、故人となられた多田・佐藤両先生の思い出からはじめたい。多田先生は佐藤先生と共に、一九三九年以降明大に教えにこられた。新制大学初期まで、学生諸君から専任同様にされたわっていた。多田先生の御専門は地形学で、特に平野に関する幅広いものであった。私の記憶に残っている先生の講義はゴビの砂丘のお話で、先生はシャキュウといわれた。考古学の大塚初重教授も先生のシャキュウの講義が忘れられないそうである。先生はゴビだけでなく日本の砂丘、洪水と水害、地汙りと山崩れ、さらには自然環境の変貌という人間臭い、学際的な学問分野に大きな業績を残された。

岡山先生の「明治大学文学部地理学教室の歩み」（駿台史学第三五号）によると、一九四六年六月一二日に、明大専門部を旧制の文学部にしようということが審議された教授会に、岡山先生と多田先生が出席されて

いる。新制文学部の地理の構想も、この両先生を中心に進められたようである。

かつて岡山先生は私に、「多田さんの眷属けんぞくというの君かい」といわれたことがある。まことに心外であった。当時、地理学および地理学会の革新を求めて、今では保守・反動といわれているような人も含めた、学閥を越えた若手研究者の運動があった。私もけんめいにその運動に参加していた。多田先生はその若者たちのよき理解者であり、大学院の指導教授としての先生に、私はたしかに、かなり甘えていた。そして運動の推進のために、かなり無理な注文も先生にした。こういう関係を「眷属」というとすれば、石井先生も、私よりほど先輩の多田眷属であったといえよう。思えば、渡辺 操先生、石井先生そして私と、明大の地理の専任教員は、多田人脈といえるかも知れない。多分岡山先生には、いちまつの不満があったのではないかと、今私は思う。それが後の明大地理の専任教員選考に反映し、私見によればまことにバランスのとれた明大地理スタッフの構成につながっているのではないか。全員のまことに自由な討議によってきまったことであるが。

佐藤 弘先生は、私が明大に採用された年の秋に、弘人というペンネームで「はだか随筆」というお色気の本を出され、それがあつというまにベストセラーとなり、その方で全国的有名になられた。しかし先生は戦前からわが国の経済地理学の第一人者で、戦後の若い研究者の地理学革新の運動に対して、多田先生と共に大いに力をかされた。

そうした革新的な運動の一つの結集が経済地理学会であり、その一九五四年四月二九日の創立総会は、明大でおこなわれ、佐藤先生はその初代会長に推された。以後、学園紛争時のわずかな中断を除いて、一九七九年

までその学会事務局は明大地理に置かれることになった。そして経済地理学(会)のイメージが明大地理に定着するようになったといえるように思う。

年齢順で三人目になったが、岡山先生について述べる。これからは名実とも専任教員である。

岡山先生はまことにすぐれたリベラリストであり、また信念の人で、毎週金曜日のひるに定期化された教室会議や、院生も喫煙公認の全教員、全院生参加の合同演習などは、いずれも岡山先生の発議ではじまったものである。先生はまた地理学の基本的な洋書の整備にも心を配られ、外国の学会誌のバックナンバーを全国どの大学にもひけをとらないほど、そろえられた。先生は日本の山地というか、日本列島そのものがどうしてできたかという、大へんスケールの大きな研究をしておられ、その内容の一端をうかがった時は、感動して文字通り体がふるえた。先生は一九八二年三月に、「日本の山地地形の研究」によって第一八回秩父宮記念学術賞を受けられた。まことにすぐれた学者である。そのうえ先生は、責任感が大へん強く、明大を一九七四年に定年退職されるまでの間に、文学部長、法人評議員を各一期つとめられた。現在、明大名誉教授、日本地理学会名誉会員である。先生の後任が杉原重夫氏である。

渡辺 操先生は、明大地歴科の生え抜きで、宗京、杉原先生と共に三羽がらすといわれた。アラスカ調査の際、現地の新聞にレスラーのようだと言われたくらい立派な体格で、部長をしておられた明大山岳部の悪童どもは先生に、ラッコというニックネームを献上していた。先生はまことに精力的で、研究でも交友の面でも、はるかに地理学のわくを越えておられた。なかなかつかまらない先生のことを私は、「神没・鬼没」などと名づけた。

いたものである。しかし実は先生は見かけとは逆に、神経の細かい、頼まればいやといえない心のやさしい人柄であった。先生の研究は農業の地域調査、特に北海道に関するものが多い。しかも岡山先生とちがって、時には私までまきこんで、はなばなし学際的共同研究をおこなわれたことが特徴的である。明大創立八〇周年事業の一環としておこなわれたアラスカ学術調査の団長が操先生であった。先生は思いもかけず一九七〇年二月二〇日に、六一歳で、がんで亡くなられた。学園紛争の余じんさめやらぬ時であった。

下村彦一先生は就任は小崎氏より後だが、年齢的には岡山先生より先輩であった。先生は一九六四年四月に地理の大学院博士(今の後期)課程をつくるに当って、広島大学から、岡山先生の強い要望で明大にお迎えした。すぐれた地形学者で、桜島火山の話が印象深い。ひょうひょうとした先生のお人柄は、人によっては近寄りたいたいと思われるようであるが、実は心やさしい、味のある先生である。先生が原爆手帳の保持者であることを知ったのは、私がしつこくうかがったからで、戦争の歴史は私にも思いもよらぬほど重く、先生のお心に沈んでいるのであろう。

先生を明大にお迎えする地理の教員のパーティーで、料理を待つ間に渡辺先生がタバコをくわえられた時、「こういう時にタバコを吸うとは、」と下村先生がいわれ、操先生ははっとしてタバコをポケットにしまおうとされた。その瞬間下村先生は御自分のポケットからタバコをとり出しながら、「コックさんに悪いですな。」といわれ、大笑いとなった。両先生のお人柄を示す忘れ得ぬ一幕であった。下村先生は一九七一年三月に、定年退職されたが、今も時により、明大の集りにお出かけ頂いている。日本地理学会の名誉会員となっておられ

る。

同じこの七一年三月には、助手の赤坂暢穂氏が四年の任期を終えて退任、前年に亡くなられた渡辺先生の後任を含めて、この年三人の新たな専任教員を迎えることになった。

渡辺先生の後任には、外国に強い人という岡山先生の御希望もあって、アジア経済研究所の大岩川和正氏を迎えることになった。私が使者となって、研究所の近くの喫茶店で彼をくどいた思い出がある。彼は日本では数少ない、イスラエル、パレスチナの専門家で、東京外国語大学でヘブライ語の講師を頼まれていたほど、語学にたんのうであった。自分がやっているのは地域研究であって、地誌ではないと、何度か彼は私に念を押した。森滝健一郎教授が、「東大の理学部地理を卒業した大岩川君のほうに、僕は地理屋であろうなどとは全く思っていない」といい、教養学部出身の私のほうが地理屋らしいところがある。」と苦笑したことがある。

彼は私より一〇歳も若く、見かけよりはるかに骨太の体格をしていた。その彼を突如として心臓の難病がおそった。教務主任という激務が、彼の死期を早めたのであろうか。一九八一年四月二五日、彼は逝ってしまった。誰にも信じられないほど、あまりにも早く。彼亡きあとの穴をうめるのは、ほとんど不可能に思えたが、近年学生の間で人気のある都市地理の研究者で、本学の出身者の藤田直晴氏を迎えることになった。

下村先生の後任には、前述の森滝健一郎氏を拓殖大学から、大岩川氏と同じ助教としてお呼びした。日本の水資源問題、災害や公害、地域開発といった泥くさく、かつ最も先端的な境界領域の研究にとり組み、農業土木から社会学までの広い分野の研究者と共同して、すぐれた成果をあげてこられた。授業担当の上から、自

然地理と人文地理の専門のバランスを考えざるを得ない地理学専攻で、意識してのことであったかと思うが、森滝氏はまことにすわりの良い人事であった。しかし七年半後の一九七八年九月末に、岡山大学からのかなり強引な要請と、老父のおられる郷里広島島の近くに住みたいという森滝氏自身の「ふるさと志向」とによって、彼を送り出さざるを得なくなった。人望があつく、教職員組合の委員長をつとめ、史学地理学科長の任期あけと同時に、惜しまれての転出であった。その後任として、自然から民俗まで実に幅広い研究領域で活躍しておられる千葉徳爾先生に筑波大学から来て頂けたのは幸いであった。三人目は長岡氏の助手採用である。

今では地理学専攻に助手がいなくなって久しいが、私が明大に来た時、同じ研究室に小林基夫助手がでんと座っていた。二年の任期を終えて一九五五年に、建設省の地理調査所（現在の国土地理院）に入られた。今も後輩の面倒をみて頂いている。

続いて一九五六年から四年間、内田 実氏が助手をつとめられた。その後明大付属中野高校教諭を経て、現在札幌大学の教授になっておられる。

小崎 尚氏がそのあと一、二年おいて助手となった。岡山先生の愛弟子で、誰かの後任ということではなく専任講師に採用された。この時からしばらく、明大地理の専任教員は六名となった。

しばらくたってまた地理で助手がとれることになり、赤坂暢穂氏が採用された。一九六七年のことであった。四年間在任し、今は中京大学の助教授として活躍しておられる。

そのあとの助手が、一九七一年四月就任の長岡 顕氏である。彼は二年後に、これまた誰の後任ということ

なしに専任講師に採用された。かねてから、折角養成した助手を外へ出すのはおかしいという考え方が大学の  
上層部にはあったようで、地理にとっては好都合であった。この時から明大地理の専任教員数は七名に定着し  
た感がある。

明大地理の卒業生名簿が、一九六七年以来久し振りに一九八三年に発行された。わが明大地理も、全国各地  
の研究機関や大学、高校、中学、小学校などに今やかなりの数の卒業生を送り込んでいる。そうした卒業生の  
間で交流を持ちたいという希望が高まってきた。また、地理とは直接関係のない仕事をしているが、それぞれ  
の存在をたしかめ合いたいという卒業生たちの気持がかさなった。年次によってはあまりに空白の多い名簿で  
はあるが、これもまたわが明大地理の一つの大切な歴史である。

## 12 一般教育科目

國谷純一郎

歴史を記す前に、先ず「一般教育」というものの本質や問題について少し述べて置きたい。

昭和二十四年四月から新制大学は発足したが、ここには旧制時代にはなかった「一般教育」というものが設  
置されるようになった。この一般教育は旧制の大学予科教育とは本質的に別個のものである。尤も内容的には  
旧予科とかなり共通な教科目が備えられているが、組織的に、又運営上からも全く新しい教育課程と言い得る  
のである。

しかし実際問題として見るとき、一般教育の扱いは仲々円滑には行かず、他学部はもちろん他大学において  
も多くの未解決の困難な問題をかかえたまま今日に到っている。理念的には専門教育と併立されて為されるべ  
きであろうが、場所的、時間的、労力的その他の制約もあって、旧予科的な存在になり終っているのが実情で  
ある。国立大学では教養部ないし教養学部と称せられるものが多くの大学でいち早く設置されており、右の  
ような性格は極めて著しいものと言える。しかし私大では制度的にはそうなっていないくても、旧大学予科のキ